他者影響力の自己認知と仮想的有能感が攻撃の置き換え傾向に及ぼす影響の検討

Effects of perceived sense of power and assumed competence on displaced aggression

次世代教育学部国際教育学科
高木　悠哉
TAKAKI, Yuya
Department of International Education
Faculty of Education for Future Generations

京都学園大学人間文化学部
赤間　健一
AKAMA, Kenichi
Faculty of Human and Cultural Studies
Kyotogakuen University

次世代教育学部学級経営学科
松岡　　律
MATSUOKA, Tadashi
Department of Classroom Management
Faculty of Education of Future Generations

聖カタリナ大学人間健康福祉学部
森岡　陽介
MORIOKA, Yousuke
Faculty of Health and Welfare Human Services
St. Catherine University

キーワード：他者影響力，仮想的有能感，置き換えられた攻撃

Abstract：In this study, We investigated that effect of perceived sense of power and assumed competence on BIS/BAS and displaced aggression. Participants were one hundred forty-one undergraduates and they answered four questionnaires on their university class. As a result, assumed competence did not influence BIS/BAS, and positively influenced displaced aggression directly. On the other hand, perceived sense of power negatively influenced BIS and BIS positively influenced displaced aggression. Perceived sense of power showed indirectly influences on displaced aggression through BIS.

Keywords：generalized sense of power, assumed-competence, displaced aggression

序論

社会的な関係性の中で，我々はしばしば，他者の行動や信念に影響を与えることを経験する。その一方で，自身の行動や信念も他者から影響を受けることは避けられない。このような，社会生活での他者への影響力の差異が，他者の行動を決定する場面として，たとえば，上司と部下，先輩と後輩といった関係性を挙げることができる。自身が上司であれば，部下の行動を報酬や罰を利用して変容させることができるだろう。反対に，自身が後輩であれば，先輩の意見に耳を傾け，自身の行動を修正する必要に迫られることがあるだろう。

社会心理学において，このような他者に対する影響力は，社会的影響力（social power）として研究が盛んである。この分野における伝統的な研究においては，影響力は他者への金銭的な報酬，情報，意思決定などについて決定権を保持していることと考えられている（たとえば，Fiske,1993; Kipnis, 1972）。したがって，影響力の保持が他者の行動に及ぼす影響を検討する際には，社会的な階層構造，報酬や罰の決定権を付与する実験操作が行われていると考えられる。たとえば，作業における雇用者・被雇用者といった社会的役割を実験参加者に付与する（Kipnis, 1972），あるいは，金銭報酬の配分権を特定の実験参加者に与える（Anderson & Berdahl, 2002; Berdahl & Martorana, 2006）ことで，影響力を高めさせることが，その後の個人の行動や意思決定を変容させることが明らかとなっている。

近年，影響力は，必ずしも自身の他者に対する社会的な地位の保持や他者の得る報酬をコントロールできることのみからもたらされるものでないことが指摘されている（Keltner, Gruenfeld, & Anderson, 2003; Galinsky, Gruenfeld, & Magee, 2003; Anderson, John,

& Keltner, 2012)。このような観点からの影響力研究では，影響力を社会的な干渉なしに，自身が他者にどれくらい影響を及ぼすことができるかという知覚，すなわち，心理状態と捉えている（Galinsky et al., 2003)。

影響力を心理状態と捉えることにより，影響力は地位や決定権を付与することのみでなく，単に過去に影響力を持った経験を回想することや，その心理状態を変容させる社会的以外の実験操作でも，個人内で高めることができると考えられる。たとえば，Galinsky et al.（2003）の実験２では，回想を用いて影響力が操作された。高影響力を喚起する教示は，自身が他者に対して影響力を持っていた状況で，何が起こり，どのようなことを感じたかを記述させるものだった。その一方，低影響力を喚起させる条件では，自身が何かをすることを他者にコントロールされたり，評価されたりする状況を記入させるものだった。結果として，他者に対し高影響力を保持していた過去の体験を想起した参加者は高影響力に，低影響力を想起した参加者は低影響力になることが，その後の行動が異なったことから示された。また，Carney, Cuddy, & Yap（2010）では，影響力を実験参加者に取らせる姿勢によって操作した。ここでも，影響力の操作により，その後の行動が異なることが示された。

近年，このような，心理状態としての影響力の高さは接近傾向を活性化し，低さは回避傾向を活性化する，という影響力の接近－回避理論が提唱された（Keltner, et al., 2003)。Keltner et al.（2003）の接近－回避理論は，Grey（1994）の行動活性化システム（behavioral approach system; BAS）と行動抑制システム（behavioral inhibition system; BIS）を参照している。BASは個人にとって報酬となる誘因に反応し，行動を誘発するシステムであり，BISは罰や報酬が無いことといった，行動を起こす際の恐怖になる要因に反応し，行動を抑制するシステムである（上出・大坊，2005)。Keltner et al.（2003）の理論に従えば，高影響力の知覚はBASを活性化させ，即座の行動やポジティブな情動をもたらし，低影響力はBISを活性化させ，行動が遅くなる，ネガティブな情動をもたらすことが予測される（Galinsky, et al., 2003)。実際に，高影響力者は低影響力者に比べて，不快な刺激を除くためにより早く活動を開始すること（Galinsky et al., 2003, Exp. ２），より断片化した絵から全体像を把握できること（Smith & Trope, 2006)，リーダーが部下への報酬を配分可能なグループディスカッションでよりポジティブな感情を報告すること（Berdahl & Martorana, 2006)，他者への援助行動を増加させること（Chen, Lee-Chai, & Bargh, 2001)，などのポジティブな影響を及ぼすことが明らかとなっている。

これら高影響力者のポジティブな影響の一方で，ネガティブな側面も示されている。たとえば，高影響力者は相対的に，他者の視点から物事を思考する傾向が減少すること，他者への共感性が低いこと（Galinsky, Magee, Insei, & Gruenfeld, 2006)，また，自己に対する過剰なポジティブ志向であるポジティブ・イリュージョン（外山・桜井，2001）が見られること（Fast, Gruenfeld, Sivanathan, & Galinsky, 2009）が示されている。さらに，高影響力者は相対的に，個人的な利益（目標）のために，利用するものと他者をみなす過程である客体化をより行うこと，意思決定において自信過剰であること（Fast, Gruenfeld, Sivanathan, & Galinsky, 2011）が示されている。これらを総合すると，高影響力者は低影響力者に比べ，他者を軽視するような傾向が見られる可能性がある。

日本において他者軽視は，仮想的有能感（assumed competence）として研究が盛んである。仮想的有能感は「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく，他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義される（速水，2011)。仮想的有能感は他者軽視傾向の強さを測ることで測定される（速水，2011）ため，影響力と仮想的有能感には正の相関が予測される。しかし，仮想的有能感の定義からは，仮想的有能感と高影響力者の他者軽視のような行動傾向は異なるものとも推測できる。なぜなら，高影響力者は自身が他者に対して影響力を持つというポジティブな経験を源泉として，BASを活性化させ，他者軽視的な行動を示すのに対し，仮想的有能感はポジティブ経験に関係なく他者を軽視するからである。実際に，速水・木野・高木（2005）では，仮想的有能感を測定する尺度得点とポジティブ，ネガティブ経験の量との関係性を検討した。結果として，対人的な出来事では，仮想的有能感とネガティブ経験との間に正の相関が示された。つまり，対人的な出来事でネガティブな経験を持つほど，他者軽視傾向が強かった。

これらの先行研究の結果を踏まえると，仮想的有能感を反映している他者軽視と，他者影響力の高さから誘発される他者軽視は，質的に異なるものと考えられる。ただし，これら２つの概念が行動に及ぼす影響については，類似した結果も得られている。たとえば，

過去の影響力研究（Galinsky, et al, 2006）と同様，仮想的有能感が高いものほど共感性が低くなることが示されている（速水・木野・高木，2004）。また，攻撃行動やそれに類する行動では，仮想的有能感といじめの加害経験・被害経験には有意な正の相関が示され（松本・山本・速水, 2009），いじめの経験は仮想的有能感に正の影響を及ぼすことが示されている（熊谷・杉山，2007）。さらに，速水（2011）は，過去の研究を概観し，非行少年の中で仮想的有能感が高い者は攻撃的であることを示唆している。さらに，仮想的有能感は怒りの制御と負の相関が有意であることが示されている（速水ら，2004）。

小平・小塩・速水（2007）は，仮想的有能感が高く，自尊感情が低い仮想型は，どちらもが高い全能型，どちらもが低い委縮型，仮想的有能感が低く自尊感情が高い自尊型と比較して，敵意感情を強く感じることも示している。同様に，高影響力者は低影響力者と比較して攻撃行動を増加させることが示されている（Fast & Chen, 2009）。したがって，影響力の保持が何らかの形で仮想的有能感に関連し，攻撃行動を誘発する可能性は残されている。総じて，仮想的有能感と影響力が完全に独立した概念であるかには疑問が残る。ただし，それを直接的に検討した研究は我々の先行研究の精査からは得られていない。

本研究の目的は，仮想的有能感と影響力との関係性を検討し，それらが独立か，また，異なる過程で特定の行動に関連するかを確認することである。本研究では，これら２つの概念がそれぞれ影響を及ぼす行動の１つとして，置き換えられた攻撃（displaced aggression）を取り上げる。置き換えられた攻撃とは，個人が何らかの挑発を経験した際，それをもたらした者ではない他の対象に攻撃を表出することと定義される（Hovland & Sears, 1940）。これは，日常で言う八つ当たりに該当する概念と考えられる。淡野（2008a）は，置き換えられた攻撃傾向を測定する尺度の日本語版開発に際し，それと様々な他の尺度との関連を検討した。その際，置き換えられた攻撃と直接的な攻撃行動との間に有意な正の相関が示された。前述したように，仮想的有能感と他者影響力は，共に直接的な攻撃的行動を増加させると考えられる。したがって，これらは置き換えられた攻撃にも同様の影響を与える可能性がある。ただし，それらを示した研究は我々の知る限りまだ存在しない。そのため，本研究で置き換えられた攻撃を検討することとした。また，淡野（2008a）では，置き換えられた攻撃の下位尺度である，攻撃の置き換え，怒りの反すう，報復の企図とBIS/BASとの関連を検討した。結果として，怒りの反すう，攻撃の置き換えはBISと，報復の企図はBASと有意な正の相関を示した。その一方，影響力の高さはBASを，低さはBISを活性化させることが示唆されている。したがって，影響力はBIS/BASを介して，置き換えられた攻撃と関連することが考えられる。しかし，仮想的有能感がBIS/BASを介して置き換えられた攻撃に影響を与える理論的な根拠はないため，それは直接に置き換えられた攻撃に影響すると考えられる。

方法

調査参加者

大学生141名（男性72名，女性69名）が調査に参加した。平均年齢は20.1（*SD*=1.2）歳であった。

質問紙

他者影響力の自己認知尺度　赤間（2011）の尺度を使用した。この尺度は「他者に自分のしてほしいことをさせることができる」，「他者との関係において何かする時，そうしたいと思えば，私が決めることができる」など７項目から構成された。回答法は，「１．まったく当てはまらない」から，「７．非常に当てはまる」までの７件法であった。

仮想的有能感尺度　Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan（2004）による，仮想的有能感尺度を使用した。「自分の周りには気のきかない人が多い」「世の中には，常識のない人が多すぎる」などの11項目から構成された尺度であった。「1. 全く思わない」「2. あまり思わない」「3. どちらともいえない」「4. ときどき思う」「5. よく思う」の５段階評定法で回答を求めた。

日本語版BIS/BAS尺度　Carver & White（1994）のBIS/BAS Scaleを邦訳した，上出・大坊（2005）の尺度を使用した。「何かミスをしやしないかと気になる」「楽しそうであれば，新しいことは試してみる方である」などの20項目から成り，「１．まったく当てはまらない」から，「７．非常に当てはまる」までの７件法で回答させた。

攻撃の置き換え傾向尺度（DAQ）日本語版　Denson, Pedersen, & Miller（2006）によるDisplaced Aggression Questionnaire（DAQ）を邦訳した淡野（2008a）の尺度を使用した。項目数は31項目であった。この尺度は，「気分が悪い時，他の人にやつ当たりする」などの10項目による「攻撃の置き換え」，「怒

りを経験した時はいつでも，その怒りについてしばらくの間考え続ける」などの10項目による「怒りの反すう」,「もし誰かが私に危害を加えてきたら，報復できるまで気が晴れない」などの11項目から成る「報復の企図」の３下位尺度から構成された。

手続き

調査は，2013年７月中に，岡山県下の私立大学の心理学系の講義で行った。調査用紙は，調査参加同意書，DAQ日本語版，他者影響力の自己認知尺度，日本語版BIS/BAS尺度，仮想的有能感尺度の順に用紙を綴じ，紙媒体で配布した。各質問紙の順序に関し，カウンターバランスは行わなかった。調査には講義の後半を用い，集団形式で実施した。

調査は「日常の怒りと他者との関係性に関する調査」と題して行われた。最初に，同意書の内容を説明し，講義受講者に調査参加の同意を求めた。その内容には，データは匿名化されること，質問用紙は，必要が無くなり次第破棄されること，学籍番号とデータは切り離して保管されること，を含めた。その後，各質問紙への記入を求めた。記入に関しては，最初の質問紙の記入が全員終了するまでは速く記入を終えた参加者も記入漏れがないかどうかのチェックを行うよう依頼し待機させた。調査参加者全員が１つの質問紙に記入を終えたことを調査者が確認した後，調査者の合図により次の質問紙へ記入させた。調査参加者には，受講する講義の平常点への加点，という報酬を与えられた。

結果

欠損値がある参加者を分析から除いた139名（男性71名，女性68名）の参加者を分析の対象とした。各尺度の信頼性を検討するため，それぞれの先行研究で規定された因子構造に基づき，本研究で得られたデータから α 計数を算出した。結果として，他者影響力の自己認知（７項目１因子）では α =.78，仮想的有能感（11項目１因子）では α =.90であった。また，日本語版BIS/BAS尺度において，BAS（13項目）で α =.88，BISで α =.81であった。最後に，DAQ日本語版では，３下位因子である攻撃の置き換え（10項目）で α =.94，怒りの反すうで α =.90，報復の企図（11項目）で α =.92であった。つまり，本研究で使用した全ての尺度で，高い内的一貫性が得られたと考え，以降の分析では各尺度の尺度得点を使用する。

Table１に，各尺度得点の記述統計量を示す。他者影響力の自己認知は，BISと負の相関関係が有意（r = − .31, p <.001），BISと正の相関関係が有意（r = .25, p<.01）であった。しかし，DAQ日本語版の攻撃の置き換え，怒りの反すう，報復の企図との相関関係は有意でなかった。また，他者影響力と仮想的有能感との相関関係も有意でなかった。

仮想的有能感は，BISとの相関関係は有意でなく，BASとに有意な正の相関関係が示された（r = .18, p<.05）。また，DAQ日本語版の攻撃の置き換え（r = .34, p<.001），怒りの反すう（r = .23, p<.01），報復の企図（r = .40, p<.001）との正の相関関係が有意であった。

BISは，BASと正の相関関係が有意であり（r = .24, p <.01），DAQ日本語版の攻撃の置き換え（r = .37, p <.01），怒りの反すう（r = .48, p <.01），報復の企図（r = .23, p <.01）と正の相関関係が有意であった。その一方，BASはDAQ日本語版の３下位因子のいずれとも相関関係は有意でなかった。

置き換えられた攻撃傾向に対して，仮想的有能間は直接的に，影響力はBIS/BASを介して間接的に影響する，という仮説を検討するために，共分散構造分析を行った。分析にはAMOSを使用した。変数は全て観測変数として扱った。BISとBASの誤差項の間に共分散を仮定した。また，DAQ日本語版の攻撃の，怒りの反すう，報復の企図の誤差項のそれぞれ

Table１　各変数の記述統計量と相関係数

	M	*SD*	1	2	3	4	5	6	7
1 仮想的有能感	3.55	1.14	-						
2 社会的勢力	4.06	0.88	.15	-					
3 BIS尺得	4.51	1.06	.04	-.31 ***	-				
4 BAS尺得	5.00	0.96	.18 *	.25 **	.24 **	-			
5 攻撃置き換え	2.72	1.24	.34 ***	-.09	.37 ***	.05	-		
6 怒りのはんすう	3.04	1.28	.23 **	-.09	.48 ***	.13	.57 ***	-	
7 報復の企図	2.71	1.26	.40 ***	.06	.23 **	.17	.42 ***	.66 ***	-

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

の間にも共分散を仮定した。そして，仮想的有能感と他者影響力の間に共分散を仮定した。得られたモデルをFigure 1 に示す。図中の数値は標準化推定値であり，５％水準で有意であったパスのみを示した。得られたモデルの適合度は，GFI =.980，AGFI=.939，CFI=.996，χ^2（９）=10.01，*n.s.*，RMSEA=.029であり，高い適合度を示した。仮想的有能感からBIS/BASを介さず，DAQ日本語版の攻撃の置き換え，怒りの反すう，報復の企図に正の影響が有意であった。その一方，他者影響力から，BISに負の影響が有意であり，BISから攻撃の置き換え，怒りの反すう，報復の企図に正の影響が有意だった。また，他者影響力からBASに正の影響が有意だったが，BASから攻撃の置き換え，怒りの反すう，報復の企図への影響は有意でなかった。さらに，仮想的有能感と他者影響力の間の共分散は有意でなかった。

考察

仮想的有能感と影響力の間に有意な相関は示されず，これら２つの概念は独立したものであることが確認された。影響力は，他者に関して自身が影響を与えることができると言う心理状態である。これは，対人関係に関する有能感とも考えることが出来よう。したがって，影響力といった他者に関する有能感がもたらすような他者軽視は，仮想的有能感と関連するであろう様々な認知・行動的要因に異なる影響を及ぼすことが予測される。今後は，影響力が如何なる他者軽視をもたらすのかをより精査し，それらを測定する質問紙を作成することで，仮想的有能感とは異なる他者軽視のメカニズムが明らかにされることが期待される。

本研究の結果は，他者影響力がBISに負の影響を及ぼした上で，置き換えられた攻撃に正の影響を及ぼすものだった。つまり，他者に対する影響力を低く認知するほどBISが活性化され，そのことが置き換えられた攻撃傾向を高めることが示されたと言える。ただし，淡野（2008a）では，報復の企図とBISは無相関であった。この点については今後の追試が必要だろう。しかし少なくとも，日常で置き換えられた攻撃を抑制するためには，影響力を高めることが有効である可能性が示唆される。ただし，淡野（2008b）では，先輩・後輩の地位を架空の場面で質問紙法により操作した結果，攻撃対象者の地位が低い場合，より置き換えられた攻撃が発現しやすく，最初に怒りを誘発された者の地位と同等，および，低い地位の攻撃対象者に置き換えられた攻撃が発現しやすいことを示している。このことは，自身の影響力が高いことが，特定の対象への置き換えられた攻撃をもたらすことを示しており，本研究の結果とは矛盾する。

本研究と淡野（2008b）との研究結果が異なっていた原因は，本研究のみでは明確にすることができない。しかし，調査の手法が異なることが可能性としてあげられる。本研究では，置き換えられた攻撃傾向のみを測定していたが，淡野（2008b）では，最初に攻撃を喚起する挑発者を設定し，そこで喚起された攻撃置き換え傾向が，同じ社会的な文脈で攻撃対象者に発現するかを検討していた。このように，社会的文脈を加えることで結果が異なる可能性がある。加えて，本研究では，個人の全般的な影響力を測定していたが，淡野（2008b）では地位による操作のみを行っていた。地位が高いことは，その文脈においては影響力が高いことと同義であるが，他の文脈で，あるいは，一般的な他者に対する影響力が高まっていたと結論付けることはできない。地位のみによる操作と，一般的な影響力は区別されることを示唆する研究も存在するため（Lammers, Stoker, & Stapel, 2009; Anderson et al.,

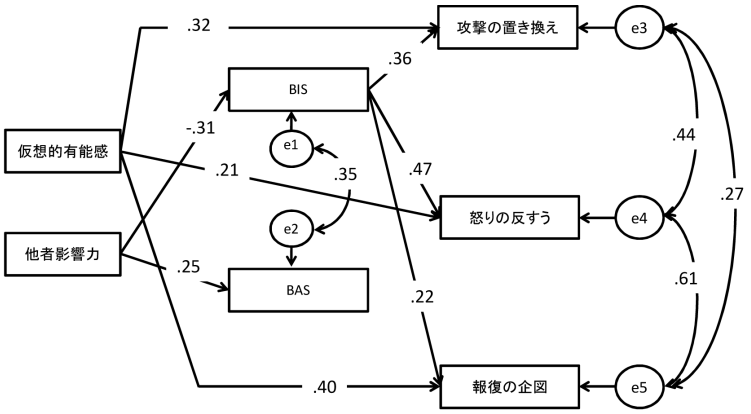

Figure 1　影響力・仮想的有能感が攻撃置き換えに及ぼす影響のモデル

2012)，これらを総合的に測定する研究が今後必要となるだろう。

本研究では，影響力はBASに正の影響を及ぼしたが，それを介し，置き換えられた攻撃傾向に影響を及ぼすことは無かった。ただし，淡野（2008a）では，BASと報復の企図に，有意な正の相関が見出されており，本研究の結果とは矛盾する。仮に，先行研究と同様の結果が得られていた場合，高影響力者はBASを活性化させ，報復の企図をより行うことが考えられるため，この点に関しては追試が必要と考えられる。

先行研究（Fast & Chen, 2009）と本研究の結果を踏まえると，高影響力者ほどBASを活性化させ直接的な攻撃行動を増加させ，低勢力者ほどBISを活性化させ攻撃の置き換えを増加させることが予測される。今後は，今回測定した尺度に直接的な攻撃行動を測定する質問紙を加えることにより，攻撃，影響力，BIS/BAS，仮想的有能感との関連をより統合的に検討していくことが必要だろう。

仮想的有能感の結果は，仮説を支持し，仮想的有能感が高まることが攻撃の置き換えを強めることが示された。攻撃の置き換えは，直接的に怒りを喚起された対象に攻撃を行わず，他の対象に攻撃するという概念である。また，攻撃の置き換えを行うものほど，家庭内暴力が多いことも示されている（Danson et al., 2006）。本研究の結果を踏まえると，そのような仮想的有能感を問題行動との関係性は，攻撃の置き換え傾向を媒介する可能性がある。

本研究では，仮想的有能感が直接的に攻撃の置き換えを誘発すること，影響力の低さがBISを活性化させることによって，攻撃の置き換えを誘発すること，影響力と他者軽視の一種である仮想的有能感とは独立であること，が新たに示されたと考えられる。本研究の結果は，影響力も，仮想的有能感も，それぞれが攻撃の置き換え傾向を強めるが，影響力に関しては，それを高めていくことが攻撃の置き換えを低下させ，仮想的有能感に関しては，それを低めていくことが攻撃の置き換えを低下させる可能性を示唆する。ただし，先行研究と矛盾する結果も少なからず見出されており，今後は，それら矛盾点を解消するような研究を推進していくことで，特に影響力と攻撃置き換えのより精緻なモデルを構築していくことが望まれる。

引用文献

赤間健一（2011）．目標志向性の誘意性次元における社会的勢力の影響　関西心理学会第123回大会発表論文集，70.

Anderson, C., & Berdahl, J. L. (2002). The experience of power: Examining the effects of power on approach and inhibition tendencies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 1362-1377.

Anderson, C., John, O. P., & Keltner, D. (2012). The personal sense of power. *Journal of personality*, **80**, 313-344.

Berdahl, J. L., & Martorana, P. (2006). Effects of power on emotion and expression during a controversial group discussion. *Europian Journal of Social Psychology*, **36**, 497-509.

Carney, D. R., Cuddy, A. J. C., & Yap, A. J. (2010). Power posing: Brief nonverbal displays affect neuronendocrine levels and risk tolerance. *Psychological Science*, **21**, 1363-1368.

Carver, C. S., & White, T. L. (1994). Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment: The BIS/BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 319-333.

Chen, S., Lee-Chai, A. Y., & Bargh, J. A. (2001). Relationship orientation as a moderator of the effects of social power. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 173–187.

Denson, T. F., Pedersen, W. C., & Miller, N. (2006). The displaced Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 1032-1051.

Fast, N. J., & Chen, S. (2009). When the boss feels inadequate: Power, incompetence, and aggression. *Psychological Science*, **20**, 1406-1413.

Fast, N. J., & Gruenfeld, D. H., Sivanathan, N. & Galinsky A. D. (2009). Illusory Control; A Generative Force Behind Power's Far-Reaching Effects. *Psychological Sciense*, **20**, 502-508.

Fiske, S. T. (1993). Controlling other people. *American Psychologist*, **48**, 621-628.

Galinsky, A. D., Gruenfeld, D. H., & Magee, J. C. (2003). From power to action. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 453-466.

Galinsky, A. D., Magee, J. C., Inesi, M. E., & Gruenfeld, D. H. (2006). Power and perspective not taken. *Psychological Science*, **17**, 1068–1074.

Gray, J. A. (1994). Three fundamental emotion systems. In P. Ekman & R. J. Davidson (Eds.), *The*

nature of emotion: Fundamental questions. pp. 243-247. New York: Oxford University Press.

速水敏彦（2011）．仮想的有能感研究の展望　教育心理学年報，**50**，176-186.

速水敏彦・木野和代・高木邦子（2005）．他者軽視に基づく仮想的有能感－自尊感情との比較から－ 感情心理学研究，**12**，43-55.

Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, **5**, 127–135.

Hovland, C., & Sears, R. (1940). Minor studies of aggression: VI. Correlation of lynchings with economic indices. *Journal of Psychology*, **9**, 301–310.

上出寛子・大坊郁夫（2005）．日本語版BIS/BAS尺度の作成　対人社会心理学研究，**5**，49-58.

Kipnis, D. (1972). Does Power Corrupt? *Journal of Personality & Social Psycholgy*, **24**, 33-41.

Keltner, D., Gruenfeld, D. H., & Anderson, C. (2003). Power, Approach, and Inhibition *Psychological Review*, **110**, 265-284.

小平英志・小塩真司・速水敏彦（2007）．仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験－抑うつ感情と敵意感情のレベルと変動制に注目して－ パーソナリティ研究，**15**，217-227.

Kono, S. (2008). Assumed competence based on undervaluing others: Empathy and direct interpersonal aggression in juvenile delinquents. *First Binennial Conference of the International Family Aggression Society*, **59**, *(Proceedings)*

熊谷　隼・杉山憲司（2007）．いじめ・いじめられ経験と仮想的有能感・自尊感情の関連性 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集，**16**，116-117.

Lammers, J., Stoker, J. I., & Stapel, D. A. (2009). Differentiating social and personal power: Oppositte effects on stereotyping, but parallel effects on behavioral approach tendencies. *Psychological Science,* **20**, 1543-1549.

松本麻友子・山本将士・速水敏彦（2009）．高校生における仮想的有能感といじめの関連　教育心理学研究，**57**，432-441.

Smith, P. K., & Trope, Y. (2006). You focus on the forest when you're in charge of the trees: Power priming and abstract information processing. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 578-596.

淡野将太（2008a）．攻撃の置き換え傾向尺度（DAQ）日本語版作成に関する研究　教育心理学研究，**56**，171-181.

淡野将太（2008b）．置き換えられた攻撃の誘発（TDA）に及ぼす挑発者及び攻撃対象者の地位の影響　教育心理学研究，2008，**56**，181-192.